研究紀要　第9号　293－308頁　2001年3月
㈶とちぎ生涯学習文化財団　埋蔵文化財センター

栃木県南東地域の五輪塔
－益子地域の五輪塔を中心として－

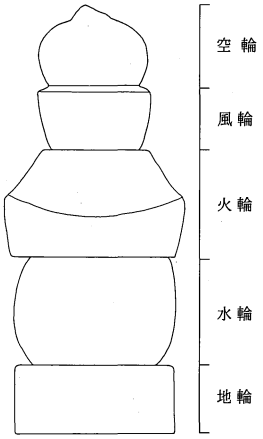
上原（うえはら）　康子（やすこ）

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　栃木県周辺地域の様相
Ⅲ　益子地域の様相
Ⅳ　まとめ
Ⅴ　おわりに

栃木県南西部の益子町には多数の中世五輪塔が存在するが、これまでに調査は実施されておらず、その実態は把握されていない。本稿では町内の五輪塔の実測調査を行ない、近県の調査・研究成果を基に若干の考察を加えた。益子地域では宇都宮家墓所や大郷戸で遅くとも14世紀初頭頃から五輪塔が造立されはじめ、15世紀以降周辺の墓地でも五輪塔が用いられるようになる。この地域では花崗岩製の五輪塔が多く、地元産の凝灰岩を用いる宇都宮地域とは様相が異なる。益子に最も近い花崗岩が採掘される場所は筑波山系の地域であり、同地域からの石造物文化の影響も少なからず及んでいたのではないか。

Ⅰ　はじめに

五輪塔研究の初期段階では五輪塔の起源に着目した論考が中心であったが(1)、近年では県や市町村などの地域を限定した詳細な調査研究が盛んである。その場合、調査対象は五輪塔に限らず板碑・宝筐印塔・石幢・宝塔・無縫塔・石仏・石龕・石堂など石造物全般に及ぶ。栃木県内における石造物の調査研究は大正時代から行なわれており(2)、昭和以降では板碑を対象にした研究が増加する(3)。市町村史編さんの際に石造物の所在調査が実施される場合もあるが、各機関により対応は様々で、計測や実測までをも行なう例は未だ少ないようである。このような状況の中、1996年松原典明氏は、宇都宮以南の地域にみら



第1図　五輪塔各部名称

れる通称「大谷石」と呼ばれる凝灰岩を用いた五輪塔についての論考を発表された。松原氏は「大谷石」を用いた五輪塔は14世紀中葉以降造立が行なわれ、近世初期まで続けられるとし、17世紀第２四半期を下野五輪塔の中世から近世への変換期と結論付けられている（松原1996）。全国規模の調査例としては元興寺文化財研究所が実施したものがあり、栃木県については足利市や粟野町に所在する鎌倉時代後期から室町時代前期の塔について触れている（元興寺文化財研究所1993）。平成９年～10年には、立正大学考古学研究室によって足利市内の石造物所在調査が実施されており、この中で五輪塔の実測調査が行なわれている（池上1999・2000）。

近年本県でも石造物を資料として扱う動きが盛んになりつつあるが、県下の様相を語るには資料の収集が不十分であり、県内各地に存在する残欠を含めた基礎資料の集成が急務である。

今回は栃木県南東部の益子町内に分布する五輪塔について実測調査を試みた。同町は中世に益子氏が活動の拠点とした地域として知られ、町内には宇都宮氏の墓所をはじめ、中世に遡る可能性のある五輪塔が点在するが、その多くは近年まで土中に埋没していた。現在五輪塔の形状を呈していても、本来の組み合わせを保っているものは少ないであろう。紀年銘を有する資料が確認されていないこと、本来の組み合わせが明らかでない塔が多いこと、この２点が当地域の五輪塔研究を遅らせた大きな要因であるといえよう。本来石造物の研究は、完形品を対象として行われるべきであろうが、益子地域においては前述の理由によりそれは困難である。

今回の調査では資料集成を主な目的としているが、五輪塔は地域色が色濃く現われる遺物であり、図化を通して益子地域の特色を捉えたい。

Ⅱ　栃木県周辺地域の様相

益子町の五輪塔について述べる前に、栃木県周辺地域における五輪塔の調査・研究成果について概観しておく。

関東地方では群馬県・千葉県で五輪塔編年の研究が行なわれており、埼玉県では県立歴史資料館が中心機関となって平成４年から６年間をかけて県下の中世石造遺物の調査を実施し、五輪塔についても分布状況や実測図などが報告されている。同資料館では、これらの成果を基にした研究が調査終了後も続けられている[4]。

群馬県では磯部淳一氏が群馬県下の紀年名を有する五輪塔の実測を行い、かつ「高さと幅の割合を基本としながら詳細に細部の割合を算出し、その数値の変化を中心として」変遷を辿り、その結果を基に無銘塔の年代推定までをも行なっている（磯部1992）。磯部氏は鎌倉時代後期以降から戦国時代末期までを三期に分け、各時期の特徴を下記のように述べている。

第１期　大型で、量感があり、ゆるやかな曲線によって構成される。

第２期　やや小型になりながらも各部分のバランスは保たれている。最大の特徴は火輪の軒

下端の反りが全くなくなることである。

第３期　塔の小型化、火輪の軒上反りの曲率の増大、全体バランスにおける空風輪の割合が増大する。この傾向は1550年代以降になるとさらに強調される。

各期の年代は下記の通り。

第１期　14世紀（鎌倉時代後期から南北朝時代末期）

第２期　15世紀（応永期とそれ以降）

第３期　16世紀

さらに磯部氏は各部位の変遷についても言及されている。各時期の特徴が最も現れる火輪については、火輪軒先の上端部と下端部の両端への反り方によって「①平安末期から鎌倉時代（1330年代まで）、②南北朝期（1330年代から1390年代まで）、③室町中期（1400年代から1500年代まで）、④戦国期（1500年代以降）」の四時期に細分している。それぞれの時期の特徴を簡略にまとめると、平安時代末期から鎌倉時代では上端部と下端部で平行に緩やかに反る。南北朝時代では下端部に比べ上端部の反りが急になる。室町時代では下端部の反りがないものが増加し、1500年以降ではそれらの傾向が甚だしくなる。また「下端の軒反りがなくなる時期である1400年を、火輪形態の転換期と考えたい。」とされている。これと共に軒先の上端部幅と下端部幅の差により生じる軒側面の外開きの傾向をも数値化し、時代が下るに従い徐々にその傾向が強くなることを捉えられた。さらに、西毛・北毛地域と東毛地域で別々の変遷が追えるという指摘もされている。

群馬県でみられた火輪軒先の下端の反りがなくなる、軒側面が外側に開く、という現象は近県でも確認されている。千葉県では香取・印旛地方において16世紀後半に登場する下総型五輪塔にこの現象がみられ、同時に空風輪の長大化、火輪軒先の上端のみが極端に反り上がる、といった特徴が目立ちはじめる（斉木1987）。埼玉県内では5001基の五輪塔が調査されており、このうちの351基が紀年銘を有する（埼玉県教育委員会1998）。所沢市妙善院の嘉暦４年（1329）銘の塔を最古とし、これに続く紀年銘の塔を年代ごとにみていくと、群馬県とほぼ同じ様相がみられる。熊谷市全昌寺の長禄３年銘塔、寄居町普光寺の明応４年銘塔など15世紀代の年号を有する塔の多くで、火輪軒先の下端の反りがなくなり、児玉町成身院の天文５年銘塔、上里町真福寺天文10年銘塔、神泉村下阿久平五輪塔群、美里町光厳寺天正17年銘塔などのように16世紀後半の塔では前代の傾向が強まりながら、空風輪の長大化や火輪軒側面が外側に開くといった特徴が加わる。

これらのことから、一見各地域で独自の発達を遂げているようであるが、基本的な変化は時期差がありながらもほぼ同様の軌跡を辿るといえる。

Ⅲ　益子地域の様相

前述した近隣地域での調査・研究成果を踏まえ、益子地域の五輪塔を概観する。

(1)　大羽宇都宮家墓所

宇都宮家の三代朝綱は、建久五年（1194）に公田百余町を掠領した疑いで土佐へ流罪となった。半年後に赦免された朝綱は、大羽の地に一村山尾羽寺を創建して隠棲した。それ以降、朝綱は大羽周辺を整備し、尾羽山地蔵院を創建して宇都宮氏の菩提寺とし、地蔵院の南側に宇都宮家の墓所を築いた。源頼朝が阿弥陀堂や多宝塔を寄進したとされ、また浄土庭園が築かれるなど大規模な造営が行なわれ、多くの堂塔が軒を連ねていたといわれる。この後、宇都宮家の墓は大正時代まで築かれ続けた。現在堂塔跡は畑地になっているが、耕作中に五輪塔の残欠が出土することもあるという。この他地蔵院には五輪塔以外の石造物として、弘安６年（1283）、正中２年（1325）銘の板碑が確認されている（益子町史編さん委員会1985）。

現在では墓所内に31基の五輪塔が立ち並ぶが、組み合わせが不自然な塔や、残欠が積み重ねられた塔もみられる。他所の五輪塔と比べ大型であり、高さ1.5mを上回る塔が多い。石材は花崗岩・凝灰岩・砂岩・角礫を含む安山岩系岩石が用いられているが（下野新聞社1970）、砂岩は近世の造立と思われる塔に多い。ここでは、各時期の特徴が最もよく現れる火輪を中心として各塔を見てゆく。

１・２号塔は全体的に風化が著しいが、おおよその形状は把握できる。各部とも同一の石材が用いられており、本来の組み合わせを保っていると考えて間違いないであろう。空風輪は一石であるが、空輪と風輪のくびれ部が一部残存しているのみで風化が進行している。水輪は量感があり、地輪は全体の高さに対し極めて低い。同墓所の中でも古い時期に属すると考えられるが、その特徴から当地域内でも最古の塔であろう。

８・10・11・14号塔の火輪軒先は上下が平行に反る。８号塔の空風輪は近世塔の部材が混入している。10号塔は地輪が失われているが石材が同一であり、本来の組み合わせが保たれていると考えられる。11号塔は全体的にバランスが悪く寄せ集められた塔であろう。14号塔の空風輪は別の塔の部材である。

３～７・９・12・13・15号塔の火輪は軒先の下端の反りがほとんどなく、上端のみがが大きく反り、４号塔以外は軒側面が外側に開く。さらに、５・６・７号塔はより上端の軒反りが強く、当墓地内の中世の五輪塔群の中でも最も新しい時期に位置付けられるであろう。３基とも凝灰岩製であり、それぞれの組み合わせは保たれているように思える。これら３基の脇にも凝灰岩の五輪塔残欠を積み上げた塔が並ぶ。

16号塔は砂岩製で、火輪の直線的な形状から近世の造立と考えられる。

８・10号塔の火輪のように、軒先の幅と頂部の幅がそれほど差がなく、やや寸詰まりの印象

第２図　益子町五輪塔分布図（Ｓ＝１／50000）

第１表　五輪塔計測表

所在	No.	部位（石材）	塔高	地高	地幅	水高	水幅	火高	火幅	風高	風幅	空高	空幅	備　考
大羽宇都宮家墓所	１図－１	角礫を含む安山岩系岩石	162	17	61	55	67	52	66	（空風高	37.5）	（空風幅	36.5）	「18代忠綱」の表示
	１図－２	角礫を含む安山岩系岩石	156	26	63	47	66	45	61	（空風高	37.5）	（空風幅	48）	「17代成綱」の表示
	１図－３	凝灰岩	151	24	55	38	59	38	59	24	41	27	39	「16代正綱」の表示
	１図－４	花崗岩	162	34	55	33	49	42	56	22	42	31	39	「15代明綱」の表示
	１図－５	凝灰岩	143	28	55	36	55	36	60	21	33	(23)	(23)	「12代満綱」の表示
	１図－６	凝灰岩	170	22	61	42	63	49	68	23	42	35	37	「11代成綱」の表示
	２図－７	凝灰岩	166	27	65	46	65	38	69	23	44	32	41	「10代氏綱」の表示
	２図－８	凝灰岩	173	42	61	41	67	37	58	20	32	33	30	「７代景綱」の表示
	２図－９	花崗岩	150	32	56	38	55	39	65	19	37	22	31	「５代頼綱」の表示
	２図－10	花崗岩	125	－	－	39	58	41	59	20	41	25	40	「４代業綱」の表示
	２図－11	砂岩	129	24	48	31	50	34	60	18	32	22	28	「20代尚綱」の表示
	２図－12	花崗岩	150	38	54	39	54	32	58	20	34	21	32	「24代隆綱」の表示
	３図－13	花崗岩	83	16	29	25	31	20	38	10	18	14	17	「初代宗円」の表示
	３図－14	花崗岩	123	40	50	34	48	28	53	8	19	13	18	「８代貞綱」の表示
	３図－15	凝灰岩	144	36	50	34	48	30	54	19	28	25	28	「２代宗綱」の表示
	３図－16	砂岩	178	45	56	42	60	39	56	34	32	19	28	「３代朝綱」の表示

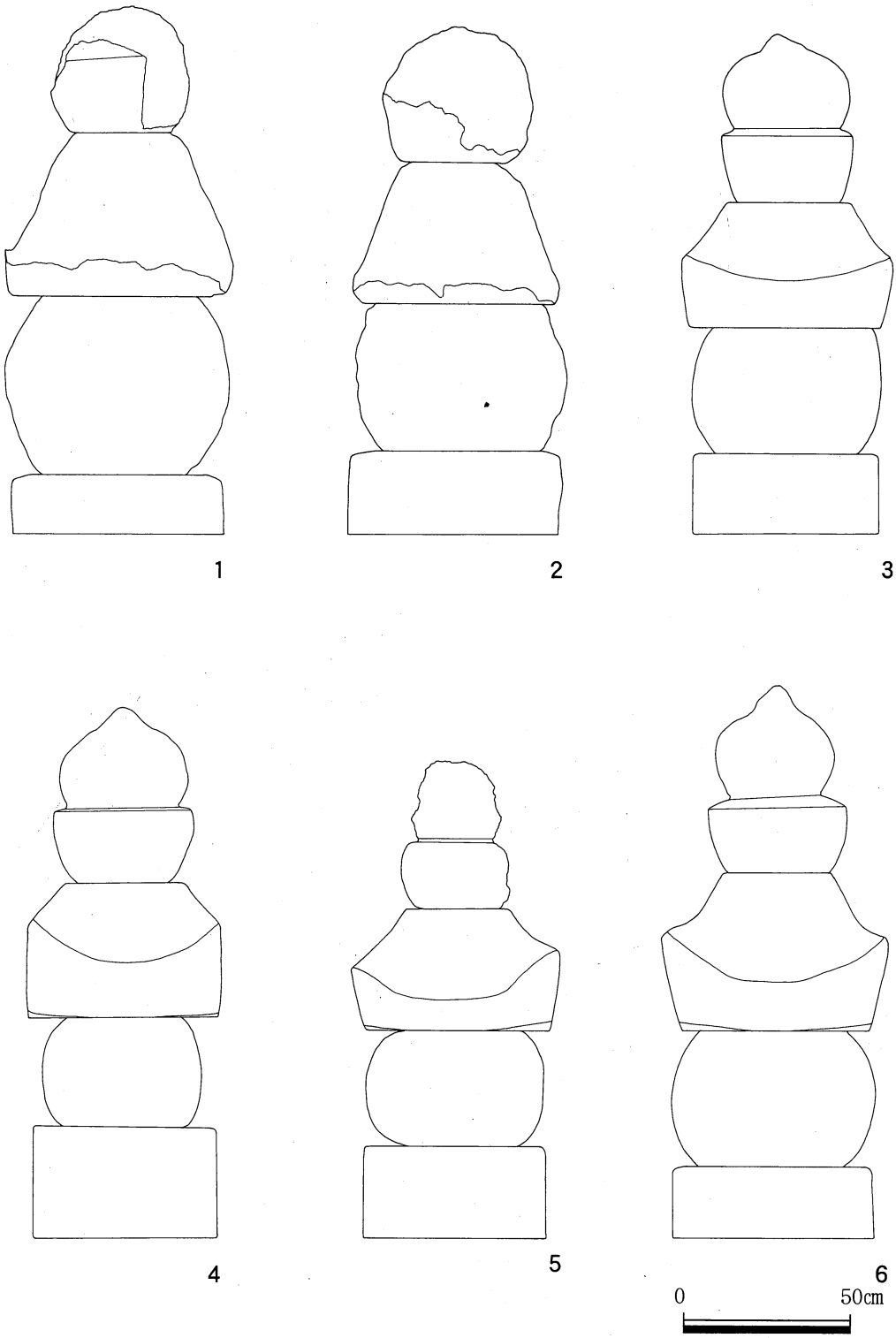
※このほか近世に造立された塔、残欠を積み上げた塔など15基の五輪塔あり。
石材の鑑定は「益子町の文化財」（下野新聞社）掲載の田中龍紀氏による。

所在	No.	部位（石材）	塔高	地高	地幅	水高	水幅	火高	火幅	風高	風幅	空高	空幅	備　考
大郷戸	４図－１	花崗岩	143	34	51	42	51	30	57	16	30	22	27	
	４図－２	花崗岩	101	25	43	25	34	22	43	12	22	18	20	
	４図－３	花崗岩	81	22	31	17	25	17	34	11	18	13	17	
	残　欠	空風輪17点・火輪８点・地輪40点（花崗岩） ※上記以外に部位の明らかでない残欠も多数存在する。												

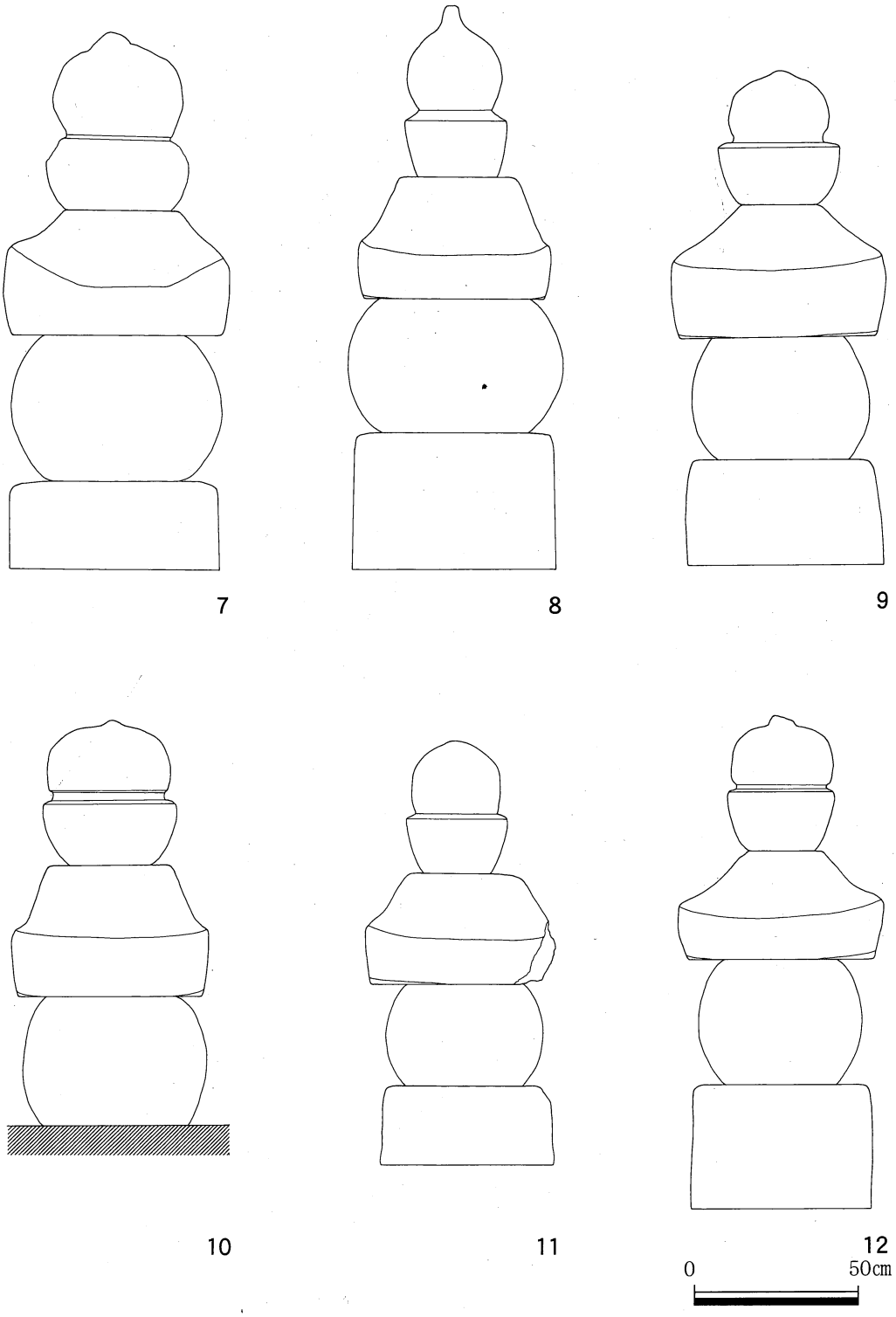
所在	No.	部位（石材）	塔高	地高	地幅	水高	水幅	火高	火幅	風高	風幅	空高	空幅	備　考
長谷寺	５図－１	花崗岩	122	26	47	34	48	28	47	14	28	20	25	
	５図－２	花崗岩	98	23	35	25	38	25	41	10	20	15	18	
	５図－３	花崗岩	101	22	39	31	48	24	42	10	18	14	17	
	５図－４	花崗岩	98	16	37	33	47	25	43	8	20	17	19	
	５図－５	花崗岩	92	16	39	31	40	25	41	7	16	14	18	
	残　欠	空風輪１点・火輪１点・水輪２点（花崗岩）												

所在	No.	部位（石材）	塔高	地高	地幅	水高	水幅	火高	火幅	風高	風幅	空高	空幅	備　考
正宗寺	６図－１	花崗岩	164	41	57	36	53	40	60	26	37	21	27	
	６図－２	花崗岩（火輪のみ凝灰岩か）	119	－	－	43	59	32	52	24	38	20	30	
	６図－３	花崗岩	98	20	35	26	37	25	39	16	21	12	19	
	６図－４	花崗岩	64	－	－	23	28	17	30	14	17	11	15	
	６図－５	花崗岩	61	10	31	17	27	14	24	11	17	9	15	
	残　欠	空風輪15点・火輪４点・水輪６点（花崗岩と安山岩が混在する） ※宝篋印塔の部材も出土している												

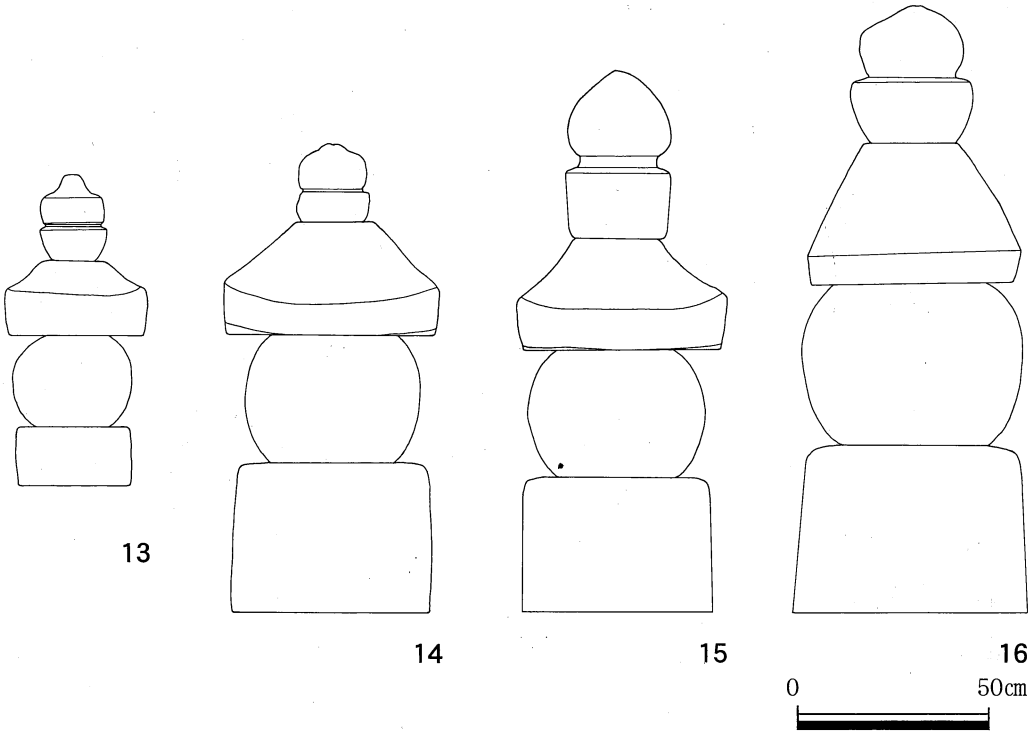
所在	No.	部位（石材）	塔高	地高	地幅	水高	水幅	火高	火幅	風高	風幅	空高	空幅	備　考
安善寺	６図－６	花崗岩	75	24	33	20	30	17	30	14	19	11	19	
	６図－７	花崗岩	81	16	34	28	37	23	41	15	23	11	21	
	６図－８	花崗岩	96	32	36	23	31	31	32	10	18	14	17	「開山良弁上人」銘
	残　欠	空風輪６点・火輪４点・水輪２点・地輪５点 （花崗岩と安山岩が混在する）												



第３図　大羽宇都宮家墓所五輪塔実測図(1)



第４図　大羽宇都宮家墓所五輪塔実測図(2)



第５図　大羽宇都宮家墓所五輪塔実測図(3)

を受けるものもみられた。このような形状の火輪は茨城県内にも認められる[5]。

(2)　大郷戸五輪塔群

昭和35年に大郷戸の行燈峯と呼ばれる山の中腹から、土砂崩れの際に発見された五輪塔群である。発見後15基ほどが持ち去られている。付近に寺屋敷と呼ばれる小さな平坦地があり、寺院跡と言い伝えられていた。五輪塔とともに13～14世紀の蔵骨器が出土しており（橋本1984)、現在では普門寺に保管されている。発見時に掘り出された塔は数基であったが、近年になって同町教育委員会が主体となって整備が実施された。現在では23基の五輪塔と多数の残欠が並べられているが、本来の組み合わせを保っているものはない。永らく土中に埋没していたため元来の形状が判別できない部材も多い。残欠の内訳は、空風輪17点、火輪８点、地輪40点で、現在五輪塔の状態に組み合わされている塔と、持ち出された塔を合わせると最低でも80基の五輪塔が存在していたと考えられる。規模の大きな墓地であったことは容易に想像されるが、同所に葬られた集団がどのような人々によって構成されていたかは一切不明である。多数の良好な遺物が出土していながら、被葬者層が明らかでないのは大変遺憾なことである。

同所の五輪塔は多数であるため、実測はごく一部に実施した。火輪を例にとると、最大幅60㎝前後、45㎝前後、35㎝前後の３種類に分けられ、概ね大・中・小に分類できる。大型の部材

は個体数が少なく、中・小型塔の部材が圧倒的に多い。

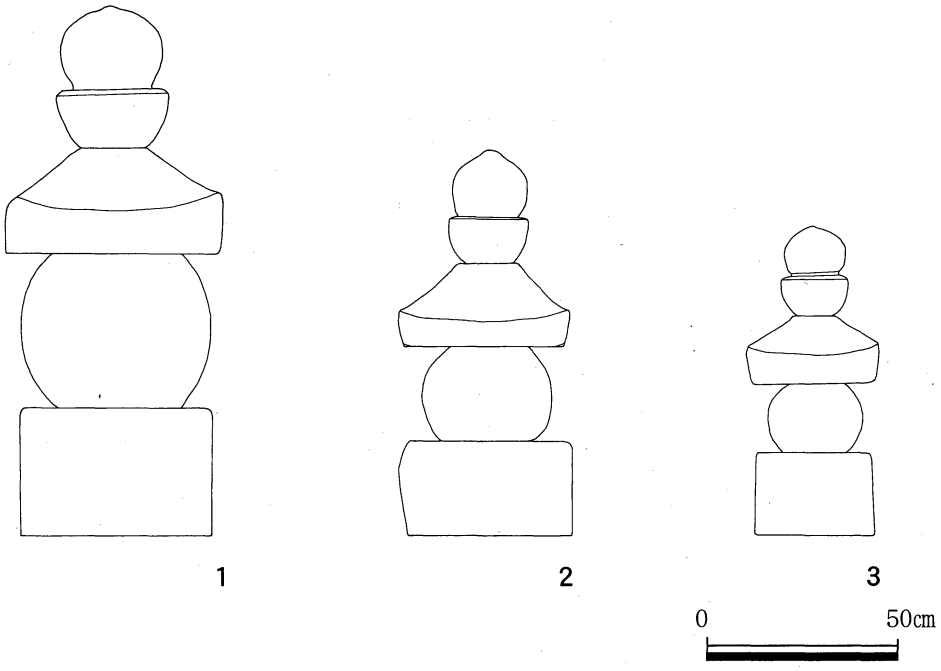
１号塔は大郷戸五輪塔群の中では最大である。水輪は重量感があり、幅に対して高さがある。２号塔の空輪は頂部が欠損しているものの、先端がやや突出する。３号塔は比較的小型の部材が積み上げられている。小型の水輪は上下のカット面が大きく、扁平なものが多い。

これらの五輪塔には以下のような共通した特徴がみられる。空輪の先端は砲弾状にわずかに隆起するが、著しい突出はない。火輪の軒先はやや薄く、軒先幅に比べて頂部の幅が極めて狭い。さらに最大幅に比べて高さがかなり低く扁平である。また、各部材の接合部分はほぞやほぞ穴を持たない。大郷戸で見られる扁平な火輪は、益子地域内の他所では見い出すことができない。同族の集団によって同一の形状が踏襲された結果と思われる。火輪の軒先は上下が平行に緩やかに反るものと、上のみが反るものの２種類がみられる。軒側面は微妙に外側に開くが、極端に大きく開くものはない。

出土している石造物は五輪塔のみで他の石塔は混入していない。五輪塔と共に数多くの径15㎝前後の扁平な石が多量に出土しており、これらは五輪塔の周囲に置かれた石であろう。石材は花崗岩が主に用いられている。

⑶　長谷寺　羽石家墓所

羽石正司家文書によれば、長谷寺は田野郷の初代領主である羽石宗時が、文永11年（1274）に現在の大郷戸に同寺を建立したことに始まる。その後建武２年（1335）に焼失したが、三代



第６図　大郷戸五輪塔実測図

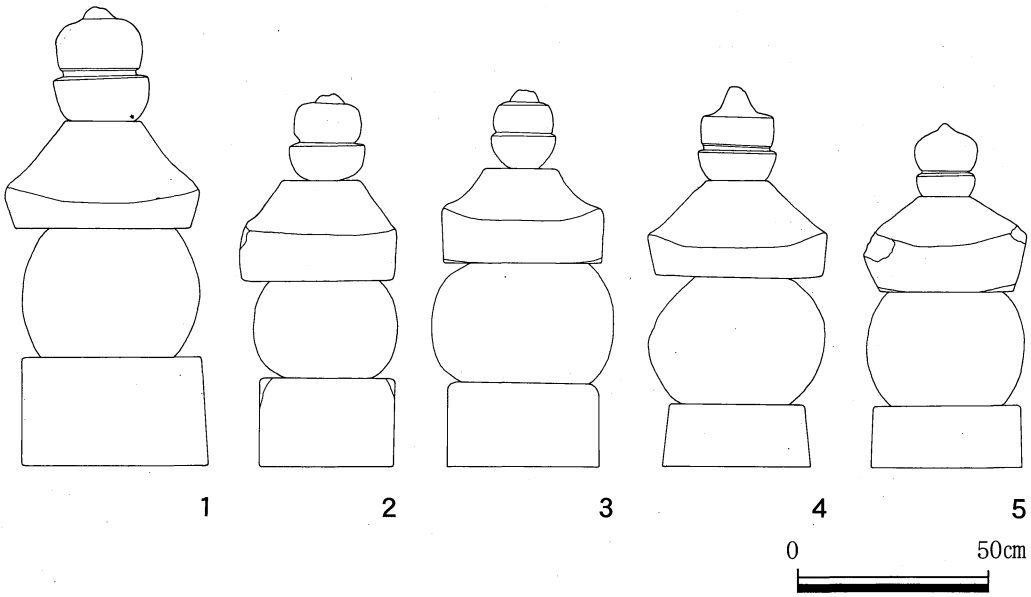
領主羽石實公が暦応４年（1339）に現在地へ再建した。五輪塔も大郷戸から移動したとの言い伝えが同寺には残っているが、これを裏付ける記録は存在しない。

五輪塔は同寺墓地の傍らに５基が並ぶが、いずれも本来の組み合わせを保ってはいないと考えられる。各塔は塔高１ｍほどである。空輪は肩が張り、先端が突出するものが多い。火輪はほとんどの塔で下端が全く反らず上端のみが反り上がる。１号塔は空風輪のくびれ部が断面コの字型を呈する。地輪は近年補われたものである。火輪軒側面が外側に開く。２号塔は火輪の軒先が厚く、上・下端共に反りが弱い。３号塔は風輪下位の張りが極めて弱い。４号塔は空輪の先端が極端に突出しており、肩が強く張る。風輪は薄く直線的である。６号塔の空輪は宝珠型を呈し、風輪は薄くやや貧弱である。火輪は軒先の反りが急激で、軒側面が大きく外側に開く。

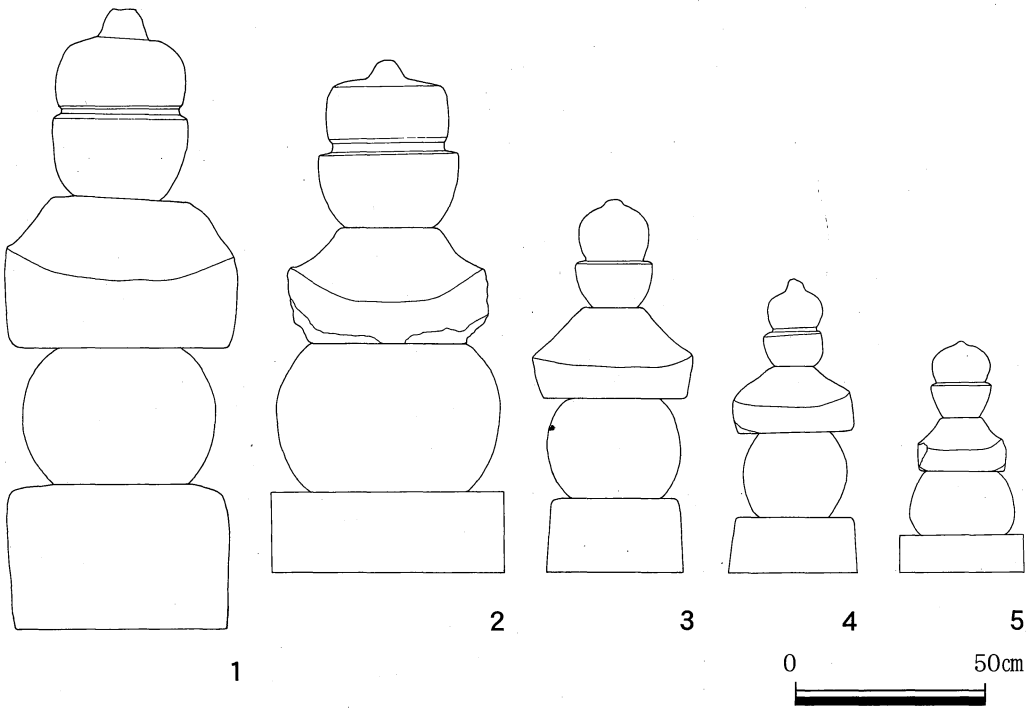
⑷　正宗寺

正宗寺は益子氏の初代行宗の父、紀仲之が開創した寺であると同寺の寺伝にはある。五輪塔は墓地内に10基ほどが存在するが、本来同寺内に建立されたものではなく、隣接する百目鬼川が明治時代に氾濫した際に発見され、正宗寺に安置された。当時、寺に移された五輪塔以外にも多数の残欠が出土したが、それらは百目鬼川の護岸に用いられ、現在では所在不明である。五輪塔以外に宝筐印塔の残欠もみられる。

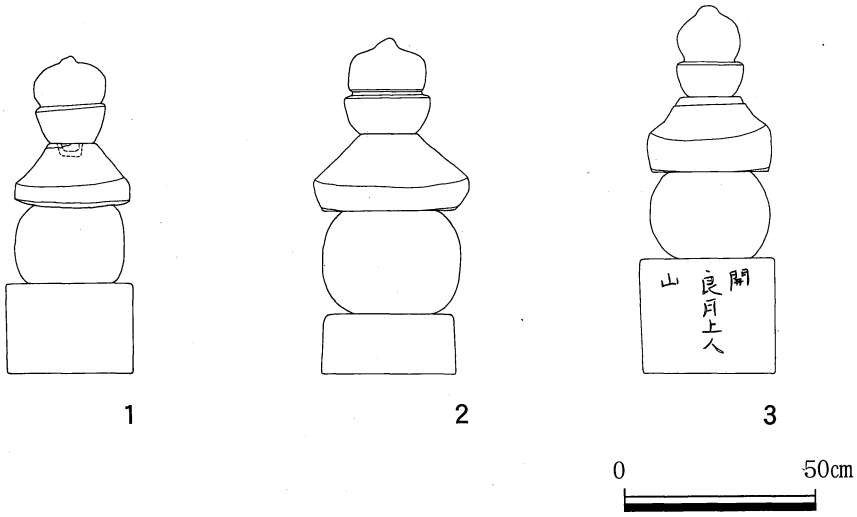
前述のように正宗寺五輪塔群は近年まで土中に埋没しており、本来の組み合わせは保っていない。１号塔は大型の部材が積み上げられており、その寸法は宇都宮家墓所の五輪塔群に匹敵



第７図　長谷寺羽石家墓所五輪塔実測図



第８図　正宗寺五輪塔実測図



第９図　安善寺五輪塔実測図

する。空輪先端は大きく突出しており、空風輪のくびれ部は断面「コ」の字型を呈する。火輪は軒先の幅に比べて頂部の幅が広く、やや寸詰まりである。2号塔は1号塔とほぼ同大の部材が積み重ねられている。空風輪のくびれ部は断面コの字型を呈するが、2号塔よりも稜が強く、空風輪共に肩が張り出す。火輪は破損が著しい。地輪は近年補われたものである。3号塔の火輪軒側面は外側に開く。4号塔の空風輪は成形が粗く、やや貧弱である。火輪は風化が進行していて角が摩滅している。5号塔の地輪は近年補われたものである。花崗岩の水輪に安山岩の空風輪・火輪がのる。固体数が少ない上に破損品が多く、小型塔の残欠も認められる。

⑸　安善寺

安善寺は平貞能が開いたと伝えられている寺院である。平貞能は平清盛とその子息重盛・宗盛に仕えた人物で、元暦二年（1185）の壇ノ浦の合戦で平家一門が滅亡した後、宇都宮朝綱が源頼朝に申し出て身柄を預かることとなり、貞能は下野の地へ赴いた。朝綱が建久五年（1194）に尾羽寺地蔵院を開く際に、貞能を益子へ招いたとされている。

同寺の墓地には正慶二年（1333）の銘を持つ板碑と共に、3基の五輪塔と宝筐印塔・五輪塔の残欠が並ぶ。1号塔の空風輪はほぞを、火輪はほぞ穴を有する。2号塔の空風輪は断面コの字型のくびれを持ち、火輪の軒側面は外側に開く。3号塔は「開山　良月上人」の銘文が施される。火輪頂部に浅い段を有しており、真壁家墓所（茨城県真壁町遍照院）で同様の意匠が施された火輪が確認されている。

Ⅳ　まとめ

今回は年代の特徴が最もよく現れる火輪を中心に、近県の調査・研究成果を基に若干の年代の考察を行う。今回5カ所で計測を行ったが、大郷戸以外では同一所在地であっても各塔で様々な形状を呈しており、また左右非対称で歪みを持つ部材が多かった。

火輪は軒先の反り方により、上端・下端が平行に反るものと、下端の反りがほとんどなく上端のみが反るものに大きく分けられる。近県の研究成果の項で述べたように、前者よりも後者の方がより新しい段階のものである。銘文が施された塔や、年代の明らかな遺物が共伴しておらず、前者から後者へ変化する時期がいつ頃であるか明確にしがたいが、群馬県では15世紀を転換期としており、埼玉県でもほぼ同時期に転換期が訪れているようである。よって当地域でも15世紀を古段階から新段階への転換期と考えても大過ないと思われる。従って、上端・下端が平行に反る火輪は14世紀もしくはそれ以前、下端の反りがほとんどなく上端のみが反り、軒側面が外側に開く火輪は15世紀以降と位置付けられるであろう。

宇都宮家墓所では古い時期の塔から近世までの塔が存在しており、年代的に幅広く揃っている。1・2号塔は前述したように低い地輪、量感のある水輪などの古い特徴を供えており、当

地域内では最古の塔と考えられる。15世紀以降と思われる５・６・７号塔は、この時期の特徴がより顕著で、近世に極めて近い時期に造立された塔であろう。大郷戸では13～14世紀の骨蔵器が同時に出土していることから、益子地域内でも古い段階から墓地が形成されたと考えられる。軒先下端の反りを失ったものが多いが、反りの極端な塔が存在せず、軒側面が微妙に開く塔があるが大きく開くものはない。これらのことから墓地は16世紀までは存続しなかったであろう。長谷寺・正宗寺・安善寺では15世紀以降の塔が多くを占める。

以上の事から益子地域の五輪塔造立の様相を推測すると、当地域内で最も早く五輪塔を採用した墓地は宇都宮家墓所、次いで大郷戸で、遅くとも14世紀初頭には導入されたのではないか。宇都宮家墓所は大正時代まで存続するが、大郷戸は15世紀代で途絶える。長谷寺、安善寺、正宗寺周辺では15世紀に入ってから五輪塔が造立されるようになる。五輪塔以外の石造物は地蔵院と安善寺に板碑が、正宗寺に宝篋印塔の笠部が１点みられる。

宇都宮家墓所10号塔、正宗寺１・５号塔のように、空輪と風輪のくびれ部が断面コの字型を呈する塔が僅かであるが確認できた。このようなくびれ部分の形状の違いは群馬県でも磯部氏によって指摘されている。西毛・北毛地域では断面コの字型の空風輪が14世紀に登場するのに対し、東毛地域ではこの形状の空風輪の初現は16世紀であった。この差を磯部氏は「それぞれ独自の形態を継承して変化していた」と、地域差であるとしている（磯部1992)。益子地域内では断面コの字型のくびれを有するものと有さないものの両方が同一地域内に存在しており、これも地域色が現れた結果であるとするならば、石工若しくは生産地の違いによるものであろうか。

宇都宮市及び周辺地域の寺院や墓地では、宇都宮市北西の大谷町で産出する通称「大谷石」と呼ばれる凝灰岩を用いた五輪塔が広く分布している（松原1996)。これに対し益子地域には花崗岩製の塔が数多く認められる。花崗岩は益子町に隣接する茨城県の筑波山系の地域で採取される。国士舘大学考古学研究室によって実施された真岡市荘厳寺層塔の調査では、笠間市稲田周辺の花崗岩、宇都宮市大谷の凝灰岩、茂木町下菅又周辺の凝灰岩、の３種類の石材が同寺の層塔や五輪塔に用いられていることが報告されており（大川他1992)、益子地域でも同様に常陸の花崗岩が使用されていたことは充分考えられる。筑波山地域は益子町に程近く、鎌倉時代中期に大和西大寺叡尊の弟子、忍性を中心とする律僧達が北関東での活動の拠点とした地域である。この地域には彼等が配下においた石工達によって石造物文化が栄えた。長期に渡るものではなかったが、筑波山周辺地域の石造物文化に与えた影響は大きく、その影響が少なからず益子地域に及んだ可能性はあろう。なお、地蔵院境内跡からは茨城県つくば市に所在する三村山極楽寺跡から出土した瓦と同笵瓦が出土しており、三村山との関わりが指摘されている（大澤1993)。常陸の五輪塔と形状が類似する塔もみられ、歴史的背景とも照らし合わせ、今

後は周辺地域の資料との比較が不可欠であろうと思われる。

宇都宮家墓所では、前述したように4種類の石材が利用されている。圧倒的に花崗岩の塔が多いが、角礫を含む安山岩系岩石→花崗岩→凝灰岩→砂岩という変遷が辿れる。地蔵院の5・6・7号塔は中世では最も新しい要素を備えた塔であるが、これら3基には凝灰岩が用いられている。益子地域内では凝灰岩の塔は稀であり、中世を通じてこの地に流通することがなかった凝灰岩が、中世末期になって新たに導入された背景にはどのような事象があったのであろうか。今回は石材について産地を特定するまでにはいたっておらず、今後は石材や石製品の流通経路をも視野に入れた詳細な調査が行なわれるべきであろう。

V　おわりに

今回は益子町内に所在する五輪塔の図化及び若干の年代の考察を試みたが、最終的に多くの課題を残す結果となってしまった。今回の試みが益子地域の中世を語る資料となり得れば幸いであるが、当地の五輪塔研究は端緒に付いたばかりであり、今後の資料の増加や充分な検討が要されることはいうまでもない。

筆者の力量不足からくる誤りや見落としがあることは充分考えられ、御教示・御批判をいただければ幸いである。

最後になりましたが、今回本稿を作成するにあたり下記の方々に御教示を賜りました。現地調査に際しましては、快く応じてくださった正宗寺、長谷寺の方々には深く感謝申し上げます。

井上瑛雄氏、高島俊一氏、高根芳明氏、橋本澄朗氏

註

(1)　川勝政太郎「平安時代の五輪石塔」『古代文化』第12巻6号　1941年、佐々木利三「五輪塔の成立」『竜谷史壇』第28号　1941年、黒田昇義「五輪塔の成立に関する一知見」『五輪塔の起原』1942年、藪田嘉一郎『五輪塔の起原』1958年

(2)　森田正安「日光瀧尾山の多寶塔と其作者」(『考古学雑誌』第三巻第二号　1912年)、小松利三郎「下野國東根に於ける元久の石塔に就いて」(『考古学雑誌』第九巻第七号　1919年)

(3)　佐藤行哉「下野の板碑について」(今立鉄雄編『下野の板碑・附年表』1971年)、

(4)　大久保かおり「宝篋印塔にみえる短冊意匠の類型と分布」『研究紀要』第18号　1996年、栗岡眞理子「毛呂山町妙玄寺所在の中世石造遺物について」『研究紀要』第19号　1997年、栗岡眞理子「同じ年月日を刻む複数基の板碑について」『研究紀要』第20号　1998年、山本修康「中世石造遺物編年にみられる月日について－紀年銘資料の数量分析にみる－試論－」、栗岡眞理子「比企郡の中世石造物について－宝篋印塔・五輪塔を中心として－」『研究紀要』第21号　1999年、以上全て埼玉県立歴史資料館

⑸　石岡市平福寺伝大掾氏墓所など

参考文献

大澤伸啓　1993「鎌倉時代関東における浄土庭園を有する寺院について」『唐澤考古　12』唐沢澤考古会
池上　悟　1999「平成９年度・足利市域石造物所在調査報告」『平成9年度文化財保護年報』足利市教育委員会
池上　悟　2000「平成10年度・足利市域石造物所在調査報告」『平成10年度文化財保護年報』足利市教育委員会
磯部淳一　1992「群馬県における五輪塔の編年」『高崎市史研究　２』高崎市史編さん専門委員会
大川　清　他　1992『考古学研究室報告　乙種第８冊　栃木県真岡市荘厳寺石造重層塔実測調査報告』国士舘大学文学部考古学研究室
川勝政太郎　1957『日本石材工藝史』総芸舎
小高春雄　1995「石塔のあり方から社会の一側面を探るー市原市を対象としてー」『研究連絡誌　第43号』㈶千葉県文化財センター
斎木　勝　1983「房総五輪塔小考」『研究連絡誌　第３号』㈶千葉県文化財センター
斎木　勝　1996「関東北西部における五輪塔造立の様相」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会
埼玉県教育委員会　1998『埼玉県中世石造遺物調査報告書』
（財）元興寺文化財研究所　1993『五輪塔の研究　平成四年度調査報告概要』
橋本澄朗　1984「下野の蔵骨器についてー当館展示資料を中心としてー」『栃木県立博物館研究紀要』栃木県立博物館
藤澤典彦　1995「『五輪塔の研究』の調査を終えて」『元興寺文化財研究所　No53』㈶元興寺文化財研究所
松原典明　1996「下野五輪塔考」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会
下野新聞社　1970『益子町の文化財』
益子町　1982『益子の歴史』
益子町史編さん委員会　1985『益子町史』第二巻古代・中世資料編
茨城県史編集委員会　1986『茨城県史』中世編
石岡市教育委員会　1996『石岡の石仏』

挿図出典

第1～９図　著者作図